元末江南の士大夫層と日本僧

榎 本 渉

1. はじめに

前近代において日中交流の頻度がピークに達した二つの時期は、南宋～元代（第一期）と明末（第二期）である。この二期の交流には共通点と相違点がある。自明な共通点としては、ともに貿易船の往来が交流手段の中心だったことが挙げられる。ただしその様態はまったく同じわけではない。第一期において、中国側では市舶司という貿易管理の官衙が設置され（東シナ海の貿易は、主に浙東の慶元＝寧波で担当）、貿易船の往来を公式に推奨して税の増収や外国産品の入手を図る一方、日本側では中央（畿内・鎌倉）の有力者が主に博多港で海商と契約を行ない、商品を託して収益を得た。貿易はもっぱら寧波－博多間で、一定の秩序の下で平和裏に遂行され、両国の政権･有力者と対立しない（共生する）形で行なわれた。

一方明は当初、民間の海上貿易を一切禁止する方針を採った。だが第二期の1540年代になると、多くの明海商が自ら日本に来航し日本銀を購入するようになり、さらに日本人やポルトガル人もこの動向に加わるようになる。これらは明においては違法行為であって、貿易にたずさわる者は民族的区別と関係なく「倭寇」と呼ばれた。明では1576年、明海商の出海が許可されるが、この時も日本への渡航は禁止されたままだった。つまり第二期の日中交流は第一期以上に盛んだったものの、それは明の公認下で行なわれたものではなく、明の統制に対抗する形で、あるいはその法の網をくぐりぬける形で展開した。明での取引地は舟山双嶼・漳州月港をはじめ、各地に点在する密貿易港である。日本では明海商が各地に来航して「唐人町」と呼ばれるエリアを形成した。東南アジアにも明人・日本人の居留区が形成され、両者の間で取引が行なわれた。このように第二期においては、第一期と比べてより多様な航路・取引地が用いられた。

第一・二期の交流ともに、日本人は中国文化に触れる機会を多く得ることができた。ただし第二期の明では日本との交流が法的に禁止されていたのだから、日本人が留学し明文化を学ぶことはできない。未遂の事例は数例知られるものの、成功例が一例もないのは、日本人が公然と明国内を渡り歩くことができなかったためだろう。したがって第二期の文化交流は、もっぱら来日明人の活動、あるいは輸入した漢籍やその写本・覆刻本の流布によるものだったはずである。これと比べた時、第一期に特徴的なのが、極めて多くの日本僧の中国留学が知られることである。1926年の木宮泰彦『日支交通史』上巻に拠れば、文献から名が知られるだけで、南宋は109人、元代は222人の日本僧が留学している。この人数は現在の研究ではおそらく５割程度は増やすことができるが、特に元代には多くの日本僧が留学しており、人的交流の面でいえば、前近代でもっとも頻繁で深い交流が実現した時期だったと言える。

元代中国に留学したのは、主に禅僧である。彼らは本場中国の禅を学んだという名声を得て帰国し、外護者を得て寺院を創建したり、大寺院の住持となって当代の日本禅宗界の指導的立場に就いたりした。彼らは元から仏教だけでなく、書画・詩文や医学・儒学・食文化など、多様な文化を日本に紹介した。しばしば欧米で日本文化の粋と誤解されている水墨画や喫茶文化も、本来は宋元代の中国に留学した日本僧や日本に渡来した中国僧によって、日本に紹介されたものである。

そして入元日本僧が元で学んだ多様な文化は、禅林内部のそれに留まるものではなかった。入元僧自身の記録として残されることが少ないため目立たないが、元の俗人士大夫の記録にはしばしば日本僧の名が見え、入元僧の交流の対象は決して禅僧のみではなかったことが分かる。本報告ではこれについて、元末（1350〜60年代）の蘇州を中心とした浙西地域における日本僧と俗人士大夫層の交流の具体相を見ていくことにしたい。

2. 入元日本僧と士大夫層

日本僧が入元する契機の一つに、師僧の著作への序跋作成、師僧の肖像画（頂相）への著賛、師僧の伝記（行状・塔銘）の撰述などの中国人への依頼がある。これはいわば教団の使命を負った入元であり、教団のバックアップも受けた者が多かったと考えられる。これらの依頼は多くの場合、入元僧が師事した元僧に対して行なわれたが、時には俗人に依頼される場合もあった。たとえば天岸慧広は1326年、同知制誥兼国史院編修官の揭傒斯に師の無学祖元の塔銘[1]の撰述を、1364年には椿庭海寿が知制誥兼修国史の危素に師の竺仙梵僊の塔銘[2]の撰述を依頼している。また無我省吾は、1365年に杭州中天竺寺住持の用章廷俊に祖師の南浦紹明の塔銘[3]の撰述を求めた後、蘇州（平江）の張士誠の下で江浙行省左丞を務めた周伯琦に篆額を求めている。周伯琦の書は元末の日本僧に人気があったようで、椿庭海寿は竺仙梵僊の塔銘に、約庵徳久は師の高山慈照の塔銘（『高山禅師塔銘』）に、それぞれ周伯琦の篆額を得ている。

もちろんこうした教団の使命に限らず、入元僧は個人的な関心から文人士大夫と詩文の交流を行なうこともあった。たとえば元末に杭州から蘇州に移った鄭元祐は、「夷僧」の描いた蘭図に題を付けている（『僑呉集』巻２、題夷僧写蘭巻）。その題詩には「老禅昔従日本来、足踏万里鯨波開」「老禅擔簦東入呉、白虹夜騰西太湖」とあり、「夷僧」が日本僧であること、蘇州に来ておそらく鄭元祐に直接絵を見せたことがうかがわれる。14世紀は元の影響下に日本水墨画が生まれる時期に当たるが、この「夷僧」はまさしくその時期に元画を学んだと考えられ、現地の著名な文人に画の評価を求めたのだろう。

元末に江陰、明初に上海に住んだ王逢の下には、大徹大𤦺・月千江長老や得中進上人などの日本僧が訪れたことが知られる（『梧渓集』巻４・５）。特に得中とは親しかったらしく、得中は廬山に遊方する時と帰国する時に、王逢から詩を送られている。興味深いのは、得中が帰国前、王逢の下で王逢が註を施した『杜詩本義』を10日近くかけて書写している

[1] 『仏光国師語録』巻９、塔銘。

[2] 『竺仙和尚語録』巻中、竺仙和尚塔銘。

[3] 『円通大応国師語録』巻下、円通大応国師塔銘。

ことである[4]。日本の禅僧が詩文の習得に熱心だったことはよく知られた事実だが、それは必ずしも禅林の中でのみ行なわれたわけではなく、俗人士大夫の説を積極的に学ぶ者もいたのである。また得中は王逢から「日本国飛梅」と題する詩を得ている[5]。これは９世紀末の日本で活躍し、後に誣告によって大宰府に配流された文人政治家菅原道真（845～903）の故事を題材にしたものである。日本には道真の大宰府配流後、京都の道真邸宅の梅の木が大宰府まで飛んできたという飛梅伝説があり、「日本国飛梅」はこれを扱った詩である。日本僧との直接的な接触によって、元の文人が日本の説話を知る機会を得たことが分かる。1342年に入元し、1351年に帰国した愚中周及は、帰国の折に北野天神（道真）の加護で海難から救われたと言われており（『愚中周及年譜抄』）、入元日本僧には天神信仰と深い関わりを持つ者もいたようである。

3. 日本僧と士大夫僧の経路

では彼ら入元日本僧たちは、どのようにして俗人士大夫たちに接触したのだろうか。彼らは基本的に仏教寺院を拠点としており、そこから俗人士大夫層につながる何らかの経路は必要だろう。断片的に残る詩文のみでこれを明らかにすることはいささか困難を伴うが、陳高華氏が整理した入元日本僧仲剛銛上人の関係史料は、これを推測する素材を提供してくれる［陳1983］。

仲剛は日本史料には一切所見がなく、日本に帰国しなかったものと思われる。だが彼の名は浙西の元人の詩文に散見し、17歳で入元して杭州に至り、18歳で蘇州虎丘山に入ったことが知られる[6]。蘇州の僧元璞良琦は、かつて蘇州虎丘山で仲剛書記と5年間ともに過ごしたことを、後に詩で詠んでいる[7]。仲剛はその後1338年、集慶（南京）へ移ったが[8]、その時に鄭元祐から送別の詩を送られた[9]。鄭元祐は元璞と同じ蘇州人で親交もあり、詩の応酬も行なう仲だった[10]。ここから蘇州における仲剛－元璞－鄭元祐という人脈が想定できる。仲剛はまず参学先の寺院の僧と親しくなり、さらにその僧と交遊のある俗人士大夫とも関係を広げていったのであろう。

仲剛は集慶では龍翔寺の笑隠大訢の下にあった[11]。笑隠と関係の深い文人に丁復・虞集がいるが[12]、この二人は仲剛とも詩文の応酬をしている。特に丁復は天寿節（皇帝の誕生

---

4 『梧渓集』巻４下、日本進上人将還郷国為録予所註杜詩本義留旬日送以八句藤其国中著姓。

5 『梧渓集』巻４下、寄題日本国飛梅有序。

国相管（菅カ）北野者、剛正有為、庭有紅梅雅好之、一日被誣謫宰府、未幾梅夜飛至、北野卒死謫所、国人立祠梅側。僧進得中云。

瘴日雲霾不放帰、精神解感禹梁飛、水香霞豔渾無恙、瘦比累臣帯減囲。

6 『元詩選』二己集所収、『檜亭集』扶桑行送銛仲剛東帰。

7 『草堂雅集』巻16、釈良琦、秋日帰虎丘懐銛仲剛書記。

8 『檜亭集』巻３、送銛仲剛之呉中兼東柯敬仲博士。

9 『僑呉集』巻５、送銛仲剛遊金陵。

10 『玉山名勝集』巻３・『夷白齋集』巻11など。

11 『全室外集』巻３、送銛上人省親。

12 『檜亭集』巻７・『蒲室集』虞集序。

日を祝う儀式）の折に龍翔寺で仲剛と詩の和韻をしており[13]、仏寺に出入りする俗人士大夫とそこにいる日本僧との間に交流が生まれたことが明白である。虞集は仲剛を20日もの間留めて帰さなかったほどの入れ込みようで[14]、仲剛の帰国に当たっては十首もの詩を送っている[15]。仲剛はその後集慶を去って帰国の途に就くが、この時丁復は蘇州の柯九思への手紙を仲剛に託している[16]。仲剛は1339年に集慶におり、柯九思は1343年末に没するから、この間のことである[17]。仲剛－笑隠－丁復－柯九思と、仏寺で生まれた日本僧と文人の人脈が日本僧の移動に伴ってさらに広がっていく様子が分かる。

集慶から蘇州経由で帰国するというのは、おそらく集慶東の鎮江から大運河で蘇州を経由して杭州まで向かい、そこから運河か海路で寧波に向かい、日本行きの便に乗るという予定だったと思われる。ところが仲剛は、蘇州まで来て行き先を変更した。大運河を戻って大都（北京）へ向かうことにしたらしい。蘇州僧の無住善住が仲剛に「送銛上人至京」という詩を送っている[18]。同じ頃に蘇州近くの常熟にいた鄭東も、大都へ向かう日本僧に詩を送っているが[19]、その中には「丹丘博士（柯九思）与（とも）に酒を飲み、青城先生（虞集）邀（むか）えて詩を賦す」と詠まれており、柯九思・虞集との関係や蘇州近辺から大都へ向かうと言う行動を見るに、この日本僧も仲剛の可能性が高い［陳1983］。当時の日本僧の参学地は江浙が中心で、福建・江西などを回ることもあったが、自らの意志で大都へ赴く例はかなり珍しい。1335～43年には元が日本船の来航を禁止しており、日本行きの便は無かったが［榎本2007、第２部第２章］、仲剛は蘇州まで来てこのことを知り、帰国を諦めて大都へ向かったものと思われる。鄭東の詩に「伝鉢して底（なん）ぞ故国に帰るを須（もち）いんや、文を把りて遂に京師を動かさんと欲す」とあるのも、こうした事情が背景にあるのだろう。

以上で見たところによれば、仲剛は蘇州虎丘山でも集慶龍翔寺でも、寺僧と交遊関係にあった俗人士大夫と接触し、詩文の応酬を行なった。移動に際しては手紙を届けることを依頼されることがあり、これも新たな人脈形成の契機になった。仲剛の場合は俗人士大夫との関係が特に強かったように見えるが、俗人との接触自体は決して特殊なケースではない。

たとえば入元僧椿庭海寿が1364年、師の竺仙梵僊の塔銘撰述を危素に、篆額を周伯琦に依頼したことは、前章で触れた。椿庭が嘉興で師事した竺仙の法兄了庵清欲は1363年に示寂したが、その塔銘の撰述も危素に依頼されているので[20]、おそらく両塔銘の依頼は同時に行なわれたのだろう。ただし危素は当時大都におり、1350年の入元以来嘉興周辺を行動

---

13 『檜亭集』巻８、天寿節龍翔寺習儀次韻銛上人。

14 『元詩選』二己集所収、『檜亭集』扶桑行送銛仲剛東帰。「天上帰来虞閣老、留之廿日、掃堂置禅床、笑謂門生及児子、海国有圭与璋」。

15 『道園学古録』巻27、送海東銛上人十首。

16 『檜亭集』巻３、送銛仲剛之呉中兼東柯敬仲博士。

17 『檜亭集』巻３、送銛仲剛之呉中兼東柯敬仲博士・宗典『柯九思史料』年譜（上海人民美術出版社、1963）。

18 科学院図書館蔵『谷響集』。「江南初春雪載途、送爾作賓于皇都、冀北逐空群襭繰、海東生此真珊瑚」とあり、ここで言う「京」は明初の都南京のことではなく、元の都大都である。

19 『草堂雅集』巻７、鄭東、送日本僧之京。

20 『了菴清欲禅師語録』巻９、慈雲普済禅師了菴欲公行道記は、明初に宋濂が撰述したものだが、これは「国史危公（危素）の撰する所の銘文」を基にしたものと書かれている。

範囲とした椿庭はもちろん、嘉興・蘇州など浙西で活動した了庵とも直接の接点があったかは不明である。

だが篆額を行なった周伯琦は1357年に蘇州に下るまで大都におり、しかも危素とは同時期に史官・経筵官を務めた同僚だった[21]。塔銘依頼の直接の窓口は周伯琦だった可能性が高いが、この周伯琦と交遊のあった僧に仲銘克新がいる。1354年には嘉興水西寺におり、1360年以前に同寺の住持に就任している[22]。周伯琦と仲銘はともに江西鄱陽の出身であり、同郷の誼により親しく交わった[23]。仲銘は危素とも人を介して手紙を送り合う仲だったが[24]、周伯琦を通じて生まれた縁だろうか。仲銘は了庵・椿庭とも交遊があり[25]、椿庭らから危素・周伯琦への塔銘撰述・篆額の依頼には仲銘が関わっている可能性が高い。おそらく背後にある人脈は、椿庭－了庵一門－仲銘－周伯琦－危素というものだったのだろう。椿庭は嘉興三塔寺の裕之智寛[26]、蘇州の蘇大年[27]、紹興崇報寺の行中至仁[28]などからも詩文を贈られているが、彼らはすべて仲銘と親しい人物である[29]。椿庭が元の僧侶や俗人士大夫との間に持っていた人脈には、了庵－仲銘の縁を通じて得たものが少なからずあったのではなかろうか[30]。

4. 玉山草堂と日本僧

前章では仲剛・椿庭という日本僧側の視点から、元の俗人士大夫との交流を見たが、逆に元人側から見た場合、特定の人脈の中に多くの日本僧が出入りしていることがうかがえる。特に元末の蘇州の場合、蘇州太倉の玉山草堂が注目される。『明史』巻285、張簡伝に「元季に当たり、浙東西の士大夫、文墨を以って相尚び、毎歳必ず詩社を聯(つら)ぬ」とあるように、元末の浙西・浙東では「詩社」と呼ばれる文人サークルが盛んに結成されたが、玉山草堂もそうした場の一つだった。

玉山草堂の中心となったのは蘇州太倉の顧瑛（徳輝、1310～69）だが、彼と文雅の交わりを持った文人の詩は『草堂雅集』『玉山名勝集』『玉山紀遊』などに集成されている。特に『草堂雅集』については、従来『四庫全書』所収の14巻本しか公刊されていなかったのに対し、2008年に中華書局から陶湘渉園刻本18巻を底本とした校点本が出版されたことで、史料状況が改善された。もちろんこれらに登場する文人が顧瑛と交流を持った時期には幅

---

21 危素・周伯琦の伝については、『宋濂全集』芝園後集巻９、故翰林侍講学士中順大夫知制誥同修国史危公新墓碑銘、および芝園続集巻４、元故資政大夫江南諸道行御史台侍御史周府公墓銘。

22 『金玉編』巻１・『崇禎嘉興県志』巻８、水西禅寺。

23 『雪廬藁』周伯琦序・『金玉編』巻３、奉贈仲銘上人郷旧。

24 『雪廬藁』送帖尚書還朝兼簡危参政。

25 『金玉編』巻１・『鄰交徴書』２編巻１、元、送寿上人還日本序。

26 『続本朝通鑑』巻146、応安６年９月戊申条。

27 『東福諸祖行状』瑞龍山語心院椿庭和尚行実。

28 『了菴清欲禅師語録』附録、南堂和尚語録続集序。

29 『金玉編』巻１、送仲銘上人遊会稽・宿仲銘方丈・巻３、雪廬師過呉門以雪廬藁金玉編見貽・『雪廬藁』奉寄崇報仁禅師并序。

30 なお椿庭・仲銘周辺人物の交遊の詳細については、拙稿を参照のこと［榎本渉2011］。

があり、必ずしも彼らすべてが相互に関係を持ったわけでもない。また顧瑛との関係にしても、一時的なものから日常的なものまで親疎はまちまちである。だが一つの目安として、元末太倉の文人の交遊範囲を知る材料にはなるだろう。

そこで試みに、『草堂雅集』に詩が収録される文人の一覧を、表としてまとめておいた。顧瑛自身も入れて総勢81名となるが、その中にはもっぱら浙西で暮らした顧瑛や楊維楨だけでなく、大都に仕官した張翥・黄溍らもおり、また画家として知られる倪瓚・王蒙・王冕、元曲の作者として知られる高明なども見える。漢人の士大夫以外にも、タングート族の昂吉、道士の張雨・熊夢祥・鄭守仁・于立・張簡、釈餘沢以下10名の仏僧が含まれており、玉山草堂には実に多彩な人々が出入りしていたことが分かる。

『草堂雅集』収録の文人一覧（陶湘渉園刻18巻本）

No.	名前	年代	著作
1	顧徳輝（顧瑛）	1310–69	『玉山璞稿』 『玉山逸稿』
2	柯九思	1290–1343	『丹丘生稿』［3戊］
3	陳旅	1287–1342	『安雅堂集』
4	李孝光	1296–1348	『五峰集』
5	陳基	1314–70	『夷白斎藁』
6	宗本先	1308–81	［癸己上］
7	彭冢		『仲愈集』［3庚］
8	盧昭		
9	束宗庚		［癸辛上］
10	束宗癸		
11	文質		『学古集』［3庚］
12	馬麐		『公振集』［3辛］
13	楊維楨	1296–1370	『東維子文集』 『鉄崖先生古楽府』 『復古詩集』 『鉄崖咏史』 『鉄崖逸編』 『西湖竹枝集』 『麗則遺韻』
14	黄溍	1277–1357	『黄文献公集』 『金華黄先生文集』 『日損斎筆記』 『日損斎稿』［1丁］
15	丁復		『檜亭集』
16	唐棣		［癸己上］ （『休寧稿』『味外味稿』）
17	鄭元祐	1292–1364	『僑呉集』 『遂昌雑録』
18	張天英		『石渠居士集』［3庚］
19	呉克恭		『寅夫集』［3庚］
20	陳方		『孤蓬倦客稿』［3庚］
21	項炯	1278–1338	『可立集』［3戊］

22	張翥	1287–1368	『蛻庵集』 『蛻庵詞』
23	張雨	1283–1350	『句曲外史集』 『元品録』
24	高明	–1359	『柔克斎詩輯』
25	趙渙		［癸己上］
26	宋沂		『春詠亭稿』［3庚］
27	涂穎		
28	張遜		『渓雲集』［3庚］
29	陸徳源	1282–1340	［癸己上］
30	張舜咨		［癸己上］
31	熊夢祥		『松雲道人集』［3庚］ （『釈楽書』）
32	趙奕		
33	潘純	1292–	『子素集』［3庚］
34	姚文奐		『野航亭稿』［2庚］
35	瞿智（瞿栄智）		『睿夫集』［3辛］
36	黄文徳		［癸庚下］
37	鄭守仁		『蒙泉集』［3壬］
38	張簡		『雲丘道人集』［3辛］
39	倪瓚	1301–74	『雲林詩集』 『清閟閣全集』
40	鄭東		『鄭氏聯璧集』［3庚］
41	李元珪		『廷璧集』［3庚］
42	張渥		『貞期生稿』［3庚］
43	李瓚		『弋陽山樵稿』［3庚］
44	王褘	1322–73	『王忠文公集』 『大事紀続編』
45	昂吉		『啓文集』［3庚］
46	李簡		
47	袁泰		［1甲］
48	唐元		『筠軒集』
49	顧盟		『仲贅集』［3庚］
50	郭翼	1305–64	『雪履斎筆記』 『林外野言』
51	呂誠		『来鶴亭集』 『既白軒稿』［3辛］ 『竹洲帰田録』［3辛］ 『敬夫集』［3辛］
52	徐達左	1333–95	『金蘭集』 （『孟子内外篇』）
53	郯韶		『雲台集』［2辛］
54	陸友		『杞菊軒稿』［3庚］ 『硯北雑志』 『墨史』 （『硯史』『印史』）

55	王蒙	–1385	
56	衛仁近		『敬聚斎稿』［3庚］
57	于立		『会稽外史集』［3壬］
58	秦約	1316–	（『樵海漫稿』『詩話旧聞』『師友話言』『樵史補遺』『孝節録』）
59	胡助		『純白斎類稿』
60	卞思義		『宜之集』［3庚］
61	屠性		『彦徳集』［3庚］
62	陳秀民		『寄情稿』［3庚］ 『東坡文談録』 『東坡詩話』
63	王鑑	1294–1366	『明郷集』［3庚］
64	王冕	1287–1359	『竹斎詩集』
65	余日強	1303–54	［癸庚下］ （『尚書補注』『淵黙叟集』）
66	李廷臣		［癸己上］
67	周砥		『履道集』［3庚］ 『荊南唱和集』［3庚］
68	陸仁		『乾乾居士集』［3辛］
69	袁華	1316–	『耕学斎詩集』 『可伝集』
70	繆侃		［癸辛上］
71	湯成		
72	釈餘沢	1277–	［癸壬上］ （『長春集』）
73	釈那希顔		［癸己上］
74	釈宝月		［癸己上］
75	釈祖柏		『不繋舟集』［3壬］
76	釈良琦		
77	釈文信		『雪山集』［補遺壬］
78	釈子賢		『一愚集』［3壬］
79	釈来復	1319–91	『蒲庵集』 『澹游集』
80	釈自恢		『復元集』［補遺壬］
81	釈楚石		『楚石梵琦禅師語録』 『西斎浄土詩』 （『鳳山集』『北遊集』）

＊ 顧徳輝自身は『草堂雅集』に採用されていないが、編者として挙げておく。
＊ 名前に下線を引いたのは、楊維楨編『西湖竹枝集』にも見えるもの。
＊ 生没年に関しては、各著作や正史・墓誌銘の他、『元人伝記資料索引』『中国文学家大辞典』『中国文学大辞典』等を参照した。
＊ 著作に［～］を附すものは、『元詩選』の抄出でのみ伝わるもの。たとえば「『寅夫集』［3庚］」は、『寅夫集』の抄出が『元詩選』三集庚集に収録されていることを示す。
＊（　）は現存未確認のもの。

この中で、柯九思【No. 2】・丁復【No. 15】・鄭元祐【No. 17】・鄭東【No. 40】・元璞良琦【No. 76】が日本僧と接触したことはすでに述べた。他にも詳説はしないが、楊維楨【No. 13】・張翥【No. 22】・張雨【No. 23】・王冕【No. 64】・道元文信【No. 77】・一愚子賢【No. 78】・見心来復【No. 79】・楚石梵琦【No. 81】は日本僧との関係が知られ、特に仏僧の見心と楚石は、現在知られるだけでそれぞれ数十人に及ぶ日本僧との交流が知られる［玉村1981、佐藤1997］。『草堂雅集』に詩が採録されていない者で顧瑛との交友が確認される人物もおり、その中には先述の王逢や仲銘克新、あるいは常州の謝応芳[31]など、日本僧との交友が確認できる者もいる。

なお玉山草堂の面々と接触した外国僧には高麗人もいた。両浙を遊方した無外式上人という人で、1341年には張雨・黄溍【No. 14】らと詩の応酬を行なっている[32]。張雨は無外が書いた蘭図に題も付けたことも知られる[33]。さらに無外の帰国に当たっては、張翥が送別の詩を送っている[34]。このように、玉山草堂に出入りした俗人・僧侶・道士らは、しばしば異国の僧侶たちとも交わり、その僧侶たちは彼らの人脈を伝ってさらに多くの文化人と交流することができたのである。もちろん元末の詩社は玉山草堂に限るわけではなかったから、蘇州・太倉から離れた場所で活動した日本僧・高麗僧は、また別の人脈に触れることもあったに違いない。

5. 玉山草堂から日本へ

玉山草堂の面々に注目すると、興味深い事実に気づく。それは玉山草堂の構成員中に、来日経験のある者がいるということである。この点についてはすでに以前考察したことがあるので、確認できる史実のみ提示することにしたい［榎本2007、第３部第２章］。一人は陸仁【No. 68】である。彼は崑山（当時は太倉に治す）の人で、顧瑛とは親戚の関係にあったこともあり、玉山草堂常連の一人だった。進士の地位にあり、蘇州で教授を務め、1525年に太倉に建てられた郷賢祠にも祀られた。古文を好み詩作も疎かにせず、楷書・草書とも優れていたという。居室は乾乾斎と名付けられ、これに因んで『乾乾居士集』という詩集も編纂された（『元詩選』三集辛集に抄出あり）。張士誠時代（1356～67）にも太倉にいたようだが、張士誠が朱元璋と戦争を始めた1365年頃に日本に亡命して博多聖福寺に滞在し、1368年に明の統一によって治安が安定したことを聞くと帰国した。鎌倉瑞泉寺住持として鎌倉禅林で重きを為した義堂周信とも連絡を取っている。また博多では、聖福寺住持の無隠法爾の依頼で『聖福禅寺仏殿記』の撰述・篆額・書丹を行ない、妙楽寺呑碧楼の詩を詠むなど、文化人としての活躍も見られた[35]。

---

31 『亀巣稿』巻10、送僧帰日本。

32 『燕石集』巻７・『金華黄先生文集』巻６など。

33 『句曲外史貞居先生詩集』巻１、題無外墨蘭。

34 『蛻菴集』巻５、送式無外帰高麗。

35 以上、『草堂雅集』巻15・『元詩選』三集辛集・『西湖竹枝集』・『澹游集』巻中・『珊瑚木難』巻３、方寸鉄銘・『弘治太倉州志』巻４・『嘉靖太倉州志』巻９・『鄰交徴書』３篇１、聖福禅寺仏殿記・『石城遺宝』寄題呑碧楼・『空華日用工夫略集』応安元年12月17日条・応安３年９月23日条・『空華集』

道元文信【No. 77】は幼くして出家し禅旨を悟り、集慶保寧寺の古林清茂や杭州浄慈寺の東嶼徳海などに師事した。保寧寺時代には竺仙梵僊・東陵永璵と同門だったが、この二人はそれぞれ1329年・1351年に来日し、日本の五山寺院を歴住した僧である。既述の椿庭海寿は竺仙の弟子であり、その縁もあってか、入元後の椿庭は道元に会って達磨図を入手したことが知られる。道元は1340年代には蘇州宝華寺住持を務め、日本僧頂雲霊峰から画賛を求められている。道元は顧瑛の他、特に楊維楨や王逢から高い評価を受けており、海内の名公文人と交わり、書画にも通じたという。『雪山集』なる詩集も編まれ、『元詩選』補遺壬集に抄出がある。日本では京都建仁寺で侍者・蔵主・首座を務め、さらに京都常在光院でも首座を務めたことが知られる。来日年次ははっきりせず、1350～66年にしか限定できないが、帰国は1367～69年のことで、陸仁とほぼ同じである。おそらく彼も元末内乱の激化を避けて来日し、祖国の治安が安定すると帰国したのであろう[36]。

陸仁と道元文信が来日したのは、あくまでも内乱悪化を避けた一時的なもので、日本に定住するつもりはなかった。だがそうだとしても、当時の太倉・蘇州の一流の僧俗文化人が日本に行こうと考えた背景には、当地での日常的な日本僧の活動があったと考えられる。特に玉山草堂関係者と直接接触する日本僧がいたことは大きかっただろう。道元は実際に日本僧の訪問を受けたことがあったし、来日以前の日本僧との交流が確認できない陸仁も、他の玉山草堂の面々から日本僧の話を聞くことはあったはずである。玉山草堂から日本へと一時避難する者が現れたのは、こうした日常的な交流を前提としたものだったと考えられる。

6. おわりに

以上で見たところをまとめよう。元代中国に留学した日本僧たちは、必ずしも師事した高僧のみではなく、俗人士大夫とも接触した。その中には教団の使命として行なわれたものもあったが、日本僧が個人的な関心から詩文の交流などを行なう場合もあった。こうした縁は、寺院で師事した高僧の交遊関係の中で生まれることが多かったと考えられる。さらに日本僧の移動に際しては、移動先の俗人士大夫に宛てた手紙を託され、それが新たな人脈を生むこともあった。日本僧が接触した僧侶・俗人をつなぐ人脈の一つに、元末太倉の玉山草堂の詩社がある。顧瑛を中心として俗人・僧侶・道士など種々の文化人が集まる文雅の場であり、元末の浙西・浙東では同様の文人サークルが多く結成された。日本僧や高麗僧はこの人脈に触れることで、その交友範囲を広げていくことができた。玉山草堂に出入りした陸仁や道元文信は、元末に日本に亡命したが、その前提には玉山草堂構成員と日本僧の日常的な交流が存在したと考えられる。

巻12、贈無聞聡上人白雲巣詩序など。

36 以上、『草堂雅集』巻16・『元詩選』補遺壬集・『西湖竹枝集』・『梧渓集』巻７、次韻信道元長老菱渓草堂見寄之作有後序・『来来禅子集』次韻東陵道元二友・『中国古代書畫図目』19、故宮博物館京1-241・1-624・『式古堂書画彙考』画巻19、題呉仲圭為松巌和尚画竹・『禅林墨蹟拾遺』中国篇148・『墨蹟之写』元和６年上・『空華日用工夫略集』応安３年５月19日条・『空華集』巻14、除夜感懐詩序・『心華詩藁』重用前韻答道元など。

遣唐使や遣明使の場合、僧侶であっても中国の俗人士大夫との関係は目につきやすい。特に遣明使の場合、初めから宗教的な成果がほとんど期待されなかったため、帰国後も俗人から得た詩文や書画がアピールされやすかったという事情もある。一方で入宋・入元僧の場合は、修行得悟を目的とした留学が中心であり、帰国後にアピールされるものも仏教に関わるものが中心となった。このため後の研究者たちは、入宋・入元僧の交流の対象として俗人をあまり重視せず、せいぜい例外的な事例として紹介するにとどまった。

だがこうした研究史上の偏りは、おそらく史料上の問題だけでなく、現代の研究者の関心も大きく影響している。すなわち遣唐使・遣明使研究は広く文化交流史の問題としてとらえられてきたのに対し、入宋・入元僧研究は仏教史・仏教学の問題に限定してとらえられる傾向が強く、そのため仏僧との交流以外は注目されづらいのである。だが実際には彼ら僧侶たちは、仏教以外の様々な文化を宋元代の江南から日本に伝えていた。それが文献からどこまで復元することが可能かは一つの問題だが、そのための一つの方法として、日本僧が接した中国文化人の人脈を丹念に追っていくと言う作業は、可能性としてあり得るだろうと思う。

引用文献：

榎本渉（2007）『東アジア海域と日中交流』吉川弘文館。
榎本渉（2011）「入元日本僧椿庭海寿と元末明初の日中交流」『東洋史研究』70-2。
佐藤秀孝（1997）「入明僧無初徳始の活動とその功績」『駒沢大学仏教学部研究紀要』55。
玉村竹二（1981）「日本禅僧の渡海参学関係を表示する宗派図」『日本禅宗史論集』下之二、思文閣出版。
陳高華（1983）「十四世紀来中国的日本僧人」『文史』18。